

文化情報専攻

おお かわ ひで あき
大 川 英 明 教 授

専門分野：日本語教育、英語教育、日本事情、日本語学、言語学

特別研究の研究領域

現在、研究の主軸を日本語教育と言語学においており、この領域であれば広く対応する。私の「特別研究」では、特に言語学と外国語教育の双方に関連する問題を研究対象とする場合には適している。この他に英語教育の現場で大学生のための英語教育の実践もしているため、この分野でも対応可能である。さらに、日本語教育に関して、特に漢字圏ではない欧米人のための日本語教育、日本事情教育、留学と外国語教育などの領域にも対応可能である。

特別研究の指導及び研究上のポイント

大学院では「広く」、かつ「深く」研究していくことが肝要である。必ずしも修士論文のテーマではない専門分野に係わる情報を押さえると同時に、院生各自が選んだテーマ・領域について知識を深め、新たな研究成果を出すことになる。このような基本的な姿勢を保ちながら、研究指導をしたい。

特別研究の進め方

電子メールやビデオチャットを活用して指導を行う。また、日程や時間の許す限り面接授業・面接指導も行う。

- 【1年次】 前期：論文執筆に関する指導、テーマ選定開始
後期：テーマの絞り込み・決定、資料・データ収集、整理、分析
- 【2年次】 前期：論文構想提出、中間発表会1
後期：第一草稿提出（9月末）、中間発表会2（10月）、第二草稿提出（11月末）、
修士論文提出（1月）

お た ぎり ふみ ひろ
小 田 切 文 洋 教 授

専門分野：日本中古中世文学・日中比較文学（古典文学分野）

特別研究の研究領域

日本の文学の歴史も平安時代に入りますと、漢文学・和歌・物語・日記・説話と多様なジャンルに分化していきます。物語を見ましても、作り物語の系列を中心として個性的な作品が生まれています。頂点に立つ『源氏物語』だけでなく、その影響を多分に受けたとされる平安後期から鎌倉期の物語にもそれぞれの面白さがあります。文学が多様化・個性化したこの時期の作品を研究していくための解釈の基礎を丁寧に指導していきたいと思っています。必要があれば、くずし字や漢文などの読み方も指導します。

日本の漢詩文の歴史は、王朝時代・五山時代・江戸明治時代と大きく分けられます。漢詩が日本的な叙情詩に細分化していったのは江戸時代です。江戸時代は中国文学の受容を見ましても、新しい流れが生まれています。それは明清期の口語系統の文学の受容です。『西廂記』『水滸伝』馮夢龍「三言」など新しい中国文学が中国語学の発達とともに読まれるようになりました。こうした流れは、翻訳や翻案などを通して、日本文学に大きな影響を与えています。研究のまだ新しい分野にも目を向けていただければと思います。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生個々の問題意識を尊重しながら研究指導を行います。関連する分野の文献には、出来るだけ広く目を通してほしいと思います。個々のテーマに即した計画書をまとめることを手始めに、調査や分析を進めていきますが、なかでも、研究対象となる文献の読解を重視したいと思っています。

特別研究の進め方

E-メールを中心に指導しますが、論文作成の成果を上げるためにも、調節の付く範囲で面接授業をいます。研究テーマの発表など、全体での討論の場も持ちたいと考えています。

特別研究の研究領域

院生たちの関心ある中国の言葉と文化に関連するテーマなら幅広く取り上げ、指導していくつもりです。例えば、漢字や漢語に関する研究、日中両語の親族呼称、数に関する表現、色彩表現、身体に関する慣用表現、成語や諺に関する対照研究、縁起稼ぎの表現・しゃれ言葉・流行語・世相語にみる文化的・社会的現象に関する研究などです。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生個々人の問題意識を尊重しながら研究指導を行います。まず、関心ある分野の関連文献（中国語の文献も含む）をできるだけ広く目を通し、先行研究や通説を整理しながら、自分の研究テーマを見つけてもらいます。そして、そのテーマに即した研究計画書を作成し、さらに調査・分析を進め、できるだけ研究テーマをより深く掘り下げ、特色のある研究成果をあげるようにしましょう。テーマの選定や資料整理の方法などについて適時指導を行います。

特別研究の進め方

可能な限り、ネットワークによる指導を活用したいと思います。ほかに、Eメールによる質疑応答や面接指導も併せて利用します。必要に応じてゼミ合宿（海外ゼミを含む）を実施する予定。

1年次：4月～7月、関連文献の読解、研究テーマを考える。8月～9月、資料の収集・整理、研究テーマの絞込み。10月～3月、研究テーマ決定、修士論文の構想を練る。さらにデータ分析・細部の検討を行う。

2年次：5月連休までに修論の第1章（序章）を提出。6月末までに本論の草稿を提出、参考文献一覧を作成。8月～9月、中間発表。10月～12月、論文の加筆・修正作業。1月、論文提出。

特別研究の研究領域

1. 文学関連

- (ア) 日本古代文学、特に『万葉集』を中心に、『古事記』『風土記』『古代歌謡』に関する作品研究
- (イ) 日本近代キリスト教文学、特に宮沢賢治、三木露風、野村胡堂などにおけるキリスト教に関する研究
- (ウ) 児童文学、例えば古代から伝わる「浦島」「竹取」「桃太郎」「花咲じい」などを素材とした児童文学系統に関する研究

2. 古代文化関連

- (ア) 7世紀、8世紀の古代日本の文化と考古学との関わりに関する研究
- (イ) 古代日本文化における東西連続性に関する研究

特別研究の指導及び研究上のポイント

研究とは、新しい発見であることから、テーマが重要な意味を持つと言えよう。

テーマを見つける方法として、次の2点がある。まず関心の所在を言葉にしてみることである。また、興味に関する先行研究や通説を整理して、問題点を探す方法がある。

個々の興味や関心にそって、適切なるアドバイス、指導をする。

特別研究の進め方

1年次

- (1) 論文に関しての一般的指導
- (2) テーマ選定の準備
- (3) テーマの決定
- (4) 研究文献目録の作成と収集
- (5) 研究テーマの報告会
- (6) 資料・研究論文の読み込みと問題点の整理

2年次

- (1) 論文構想の提出
- (2) 論文中間発表会
- (3) 下書き提出
- (4) 論文提出

※ 受講者と調整して、都合のつく日程で研究室において面接指導を行う。また、発表、質疑応答などを行う報告会も予定している。

特別研究の研究領域

1. 文学関連

小説、劇、詩、英米児童文学、ファンタジー、エッセイ、文学批評。文学は人間経験を解釈して芸術形式で提示したものである。文学は、他の芸術と同様に、人間経験の中心的事実－自然、究極的実在、社会関係、愛、赦し、家族、痛み、悪、死、救いなどの事実に対する認識を呼び起こし、人間生活を系統立てる際の大きな力である。人類に特有の恐怖、憧れ、価値についての知識は異文化融合への鍵であり、人類全体を結ぶ絆である。人間経験の諸相の理解、経験の解釈原理となる世界観の検証、表現形式の研究。

2. 文化関連

欧米文化の基底であるギリシャ・ローマとキリスト教の文化伝統に関する研究。二つの文化伝統の諸芸術における多様な現れに関する研究。日英・日米の比較文化・文学研究

3. 英語翻訳

対象作品は、英米現代小説、文学批評、英米児童文学、ファンタジー、西洋文化関連の著作。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生各人のうちにある知識と美の追究という欲求を満足させる研究テーマを選択できるよう懲漚し、各研究テーマに応じた研究指導を行う。

特別研究の進め方

1 年次 複数の研究テーマを考える（4月～6月）、研究テーマ決定（7月～8月）、資料収集・整理・検討 作業（7月～3月）。

2 年次 修士論文目次案提出（5月連休明け）、本論の中間発表（8月ゼミ合宿にて）、本論草稿及び結論の 原案提出（10月末）、本論最終稿及び結論の提出（11月～12月初旬）、修士論文提出（1月）。

※希望に応じて定期的に又は随時に面接指導を行う。

特別研究の研究領域

日本語教育・日本語学習者支援をめぐるテーマであれば、国内・海外を問わず、特定の教育現場や学習者に特化した問題についてできるだけ幅広く対応する。また、日本語教育の方法論や育成すべき言語能力自体の検討、国語教育や他の外国語教育との比較など教育学的な研究だけでなく、異文化語用論や学習者の誤用分析など言語学的側面も可能な限り対応する。さらに、文化を重視した言語教育、ICTを使った言語教育、自律的な言語学習をテーマとする場合、日本語以外の外国語の教育でも対応する。

特別研究の指導及び研究上のポイント

それぞれ自分の関心のある研究課題を設定し、自律的に資料収集や論文作成取り組みとともに、テレビ会議や掲示板を用いて、研究の計画、遂行、論文執筆の過程で、段階的にお互いにコメントをし合う協働学習を実践する。協働学習と教員の指導を基に、自身の研究計画や研究内容を振り返り、論文の推敲を行って、論考を深めること。また、関連の国際会議やシンポジウムなどの情報を共有するので、積極的に参加し、研究の方法や論考の深め方などについて広く学ぶこと。

特別研究の進め方

一年次は、前期に自分の選定したテーマについて先行研究をレビューし、自分の研究課題の位置づけを検討する。後期には、テーマを絞り込み、研究の対象と目的、方法を明確にし、研究計画書にまとめる。二年次は、研究計画に沿って各自文献、アンケート、インタビュー、フィールドワークなど資料やデータを収集し、分析・整理を行い、学期末に進捗状況の中間発表①（9月中旬）で報告する。後期には、中間発表①での検討を基に、論文の第1稿を作成し、中間発表②（11月中旬）で報告する。フィードバックを基に論文を推敲し、第2稿を作成。指導教官の確認を受けて、最終稿を作成して提出する。

特別研究の研究領域

日英米の現代文化・文学研究であれば可能な限り、広範に対応する。以下、幾つか具体例を挙げる。
世界文学の可能性：カズオ・イシグロ、村上春樹など、いわゆる越境する国際的作家を取り上げ、グローバル文化の一端を考察する。

多文化主義・文化相対主義の研究：英米だけでなく、日本も近年急速に多文化・多言語化してきている。こうした社会的状況と小説や映画などの文化的営為との相互作用について考察する。

ポストモダン・フィクション－歴史ナラティヴ：ポストモダニズムは「歴史」の終焉をもたらしたと批判されるが、トーマス・ピンチョン、トニ・モリソン、大江健三郎、村上春樹らの歴史ナラティヴは、むしろ歴史の再認識を促すものであることを検証する。

女性作家によるポストモダン・フィクション：トニ・モリソン、エイミー・タン、テレサ・ハッキオン・チャ、柳美里ら、抑圧の記憶を継承する女性作家の語り、従来の「主体」や「アイデンティティ」といった概念をどう変えてきたか検証する。

現代アメリカ文化・文学：モダンからポストモダンに至るアメリカの文学、演劇、映画などについて、社会と時代との関係性において、また、世界文学の観点から考察する。

上記専門分野での研究の他、国内外における言語文化教育のあり方についても、グローバル化時代の文化教育デザインの観点から調査研究を試みている。共同プロジェクトとしてのみ可能な研究課題であるので、地域やジャンルを超えた多様な領域からの参加を歓迎する。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生一人一人が関心ある研究課題に取り組み、修士論文を完成できるよう支援する。主題の選定、資料収集、論旨の確定、議論展開、論文執筆と段階的に指導を行う。実践的取り組みとして、国内外の国際会議、シンポジウム、文化交流イベントなどにもインターネットをはじめ、多様な形での参加を促す。

特別研究の進め方

1年次は、研究領域に関する情報の集積に努め、研究活動を楽しんで欲しい。

前期：比較文化・比較文学特講Ⅰ（必修科目）を受講しつつ、各自の研究主題を絞り込む。後期：「論旨」を纏め、提出（10月）。リサーチ開始（資料収集・整理）。一次資料および先行研究の解説。対象が映画等であれば鑑賞を繰り返し、分析と批評をおこなう。同時に「論旨」の改訂を重ねる。リサーチ成果報告（年度末）。

2年次では、「論旨」を起点に、研究対象の分析、解釈、考察を経て、修士論文を完成させる。早目に草稿を書き上げ、書き直し（編集）に十分な時間をかけたい。

前期：修士論文アウトライン提出（4月）。「論旨」を発展させた形での序論提出（5月）。本論執筆（7～8月）。後期：序論、本論、結論を含む第1草稿提出（9月）。研究（中間）発表会（10月）。補筆、改訂、編集作業。第2草稿提出（11月）。修士論文提出（1月）。

レポート提出システム、サイバー・ゼミ、サイバー講義、e-mailを活用して指導を行うが、定期的に面接ゼミ、また、受講生の希望に応じて個別指導を行う。夏季には日本大学軽井沢研修所において合宿を行う。

特別研究の研究領域

ロシア・欧米・日本の言語文化，文学研究，翻訳研究，出版文化であれば可能なかぎり対応したい。以下に講師の具体的研究例をあげる。

- 1) 世界文学カノン：日本や欧米の世界文学カノンがどう移り変わってきたかを，世界文学全集などを分析することで検討する。
- 2) 自己翻訳：ウラジーミル・ナボコフをはじめ，サミュエル・ベケット，ミラン・クンデラ，西脇順三郎などに見られる self-translation の方法とその可能性を作品の分析や翻訳理論の適用によって検討する。
- 3) ナボコフとアメリカの出版文化：『ロリータ』を出版したことで知られるナボコフと，出版社の関係およびその受容を主に渡米後に編集者とのあいだにかわした書簡や出版資料から分析する。

上記のほか，文芸翻訳を翻訳研究の実践の一環としておこなっている。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生一人一人が関心ある研究課題にとりくみ，修士論文を完成できるように指導する。研究課題の選定，資料収集，論旨の確定，議論展開，論文執筆と段階的に指導を行う。それぞれの関心にもとづき，国内外の関連学会・国際会議やシンポジウムなどに参加するよう求める。

特別研究の進め方

1年次は，各自研究課題についての情報・文献を収集し，問題意識を精緻な，アカデミズムで通用するものにしてほしい。

前期：演習をふくむ授業に参加しつつ，各自の研究課題を絞りこみ「論旨」を作成する。後期：問題設定のもと，リサーチを開始する（資料収集・分析・整理）。一次資料および先行研究の精読をおこなう。同時に，えられた成果をもとに問題意識の再設定と「論旨」の改訂を重ねてほしい。リサーチの成果を年度末に提出する。

2年次では，「論旨」から論文概要の作成に進み，研究対象の分析と考察を本論として執筆し，修士論文を完成させる。早目に第一稿を提出してもらい，revise に十分な時間をかけるよう指導する。

前期：「論旨」確定，論文概要作成，序論，本論の執筆と段階的に作業を進める。後期：序論，本論，結論を含む第1稿提出。研究（中間）発表会（10月）。改訂，推敲，編集作業。第2稿提出。修士論文提出（翌年1月）。

レポート提出システム，サイバー・ゼミ，サイバー講義，e-mail を活用して指導を行う他，グループ面接および個別指導を行う。

特別研究の研究領域

第二言語習得または英語教授法の研究である限り、可能な範囲で広範に対応する。大枠の研究テーマ例として、外国語習得の学習者観察と分析、学習者の情意面からみる外国語学習、効果的な学習方略を念頭においた外国語教授法、グローバル化を考慮した産官学連携外国語教育、国際英語としての英語教育など、英語教授法に係る範囲で課題を設定し、実際にデータ収集し精査・分析をする。

特別研究の指導及び研究上のポイント

各自が研究テーマを設定し、先行研究および資料を包括的に読解、データ収集、分析、論文執筆に取り組んでもらいたい。学際的な分野であることを忘れず、幅広く視野を持ちつつ、研究テーマを絞りこんでほしい。先行研究をできるだけ多く調査・検討し、総合的・分析的・探索的・演繹的研究において自分の立ち位置を明確にし、収集したデータは統計手法を用いて分析し、研究論文・修士論文にまとめていくように実施していく。教員からの指導のみならず、他の院生との協働学習を基に研究を進めるので、他の者の研究に対し批判的視点も養うこと。

また、関連する学術会議への出席や口頭研究発表を促すので、積極的に参加し、多くの学者・研究者の研究発表にも触れていくこと。

特別研究の進め方

第1年次は、自分の研究テーマの絞り込み、先行研究の収集と精読につとめ、研究計画を完成する。5月末までに興味のある事柄の概要を提出し、6月末に主要な先行研究のリスト、さらに8月末に文献調査結果を提出し、10月下旬には研究テーマを仮決定すること。11月下旬に試行研究調査計画書の提出に続き、2月中旬には試行研究調査結果を提出すること。

第2年次には、論文の概要決定から、データ収集と分析、論文の完成へと進めていく。4月初頭に論文概要を提出し、5月初旬に、研究動機・文献研究・研究方法・結果（予想）から成る簡易草稿を提出する。6月下旬までにデータ収集を完了し、分析の後7月中旬に図表提出をすること。8月末を第1回草稿提出の締め切りとし、9月下旬から10月にかけて前期課程研究（中間）発表会を行う。10月末を第2回草稿提出締め切りとし、12月下旬には修士論文提出とする。尚、教員や他の院生からのフィードバックを参考に加筆・修正を繰り返し実施し、修士論文を完成させ提出すること。

特別研究の研究領域

主に、日本の古代文学・古代文化に関する研究領域を対象とする。それを、日本国内における問題として捉えることもあるが、東アジアからの影響を視野に入れながら考察することもある。また享受に関する研究、つまり平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代などの後世の人々が捉えた古代文学・古代文化を研究対象にすることも重要な研究だと考えている。一方で、高等学校の国語科教科書も研究対象にしている。教材化された各時代の文学作品に対して、専門的な立場からその適否を評価し、今後のあるべき方向を提言する、もしくはどのような事情で教材となったのか、その歴史的な経緯や意義などを明らかにすることも必要だと考えている。

特別研究の指導及び研究上のポイント

院生にとっての修士論文は、それを書いた時の生き様を映すものだと考えている。従って、院生が現在興味を持っていることを研究テーマとして優先したい。しかし、限られた時間の中で成果を出さなければならないので、場合によってはテーマを限定するよう求めることがある。また、学外で行われている研究の現場を、自分の目で確かめることによって研究意欲が高まることがあるので、国内外で行われている学会発表、シンポジウム、講演会などへの出席も促す。院生自身が学会での研究発表を希望する場合は、その指導も行う。加えて、現地調査を奨励する。

特別研究の進め方

まずは研究テーマに関連する資料収集と資料整理、その内容に対する問題提起を繰り返してもらう。こうした基本的・実践的な作業を通して論文構成を検討し、さらに考証を積み重ねた上で、最終的にはオリジナルな論証結果もしくは問題提起を明示してもらう。指導方法は、定期的な e-mail による指導が中心になるが、日時場所を調整して直接指導も数回は行いたい。